

南島原市深江町のいわゆる 「かくれキリシタン」墓標についての検討

馬場 紀聡

1. 本稿の目的と課題

長崎県の南東部に位置する島原半島は、キリシタン大名有馬晴信の治世や島原・天草一揆など、その歴史的背景からキリシタンにまつわる資料や伝承が多く存在する。その中には潜伏期のキリシタン資料だとされる例もあるが、近世墓標の分類や変遷など、考古学的検証が行われた例は存在しない。そこで、特に「かくれキリシタン」墓とされた墓標の調査・検討を行いたい。

長崎県におけるキリシタン墓碑の調査研究は、1902（明治35）年の森豊造による墓碑の発見に始まる。森は、郷土誌編纂委員に嘱託されたことを契機として、1917（大正6）年から本格的な調査を開始する。以降、1940（昭和15）年までに80基近くの墓碑が発見された。森の調査成果を基に、片岡弥吉は68基の墓碑の写真・所在地・形状・大きさ・銘文・分布状況など詳細な情報を集積した。また、森の分類方法に基づいて、墓碑の形状を「蒲鉾型・箱型・庵型・丸庵型・平庵型・平型・蒲型・自然石立石型・自然石伏碑型・石祠型」の10種類に分類している（片岡 1942：110～117頁）。この10種類中、地面に対して、長軸を平行にして、伏した状態で置くタイプの墓碑を、キリシタン墓碑の決定原則としている。この形状の墓碑は、日本にこれまで存在したことがなく、キリシタンが死者を埋葬するとき、寝棺土葬を用いたことに由来する。日本の伏状タイプの墓碑はこの寝棺を象った形式である。その一般的なものが平型であり、特に意匠をこらし、あるいは寝棺に近似したものが「庵型（丸庵型・平庵型含む）・蒲鉾型・箱型」などであったと推測している（片岡

1942：122頁）。さらに、片岡は、日本のキリシタン墓の源流を訪ねてヨーロッパへ渡り、調査成果をまとめている。特に、地面に伏した状態で置かれる墓碑の起源は、仏教式石塔とは全く異質の墓碑民俗を発展させたとし、その源流をローマにあるとしている。また、長崎県下の墓碑に対して行った分類を10種類から15種類に改定している（片岡 1976：126～133頁）。

その後、大石一久らによって長崎県を含む全国のキリシタン墓碑が『日本キリシタン墓碑総覧』として体系的に集成された（大石編 2012）。大石は、研究者によって捉え方がまちまちであったキリシタン墓碑の定義づけを行った。また、これまでの研究で提示されていた分類項目を踏まえて、再分類し、名称や語句の統一なども行った。大石はまず、立碑と伏碑に大別している。立碑は「尖頭・圭頭形・円頭形・半円形・自然石立碑」の5種類に細分している。伏碑は「柱状伏碑」と「板状伏碑」の2種類に分け、さらに柱状伏碑は、「半円柱形（西九州型）・半円柱形（関西・京都型）・半円柱形（関西・摂津型）・方柱形・五角柱形」の5種類、板状伏碑は、「切妻形・扁平形・平形」の3種類に細分している（大石 2012：10～12頁）。さらに、田中裕介は分類した各形式を年代順に並べ、第1期：墓碑の初現期1549～1587年（布教開始期から豊臣秀吉によるバテレン追放令まで）・第2期：空白期1587～1600年（豊臣政権による迫害期）・第3期：墓碑の最盛期1601～1614年（徳川家康政権による黙認期）・第4期：墓碑の衰退期1618～1622年前後（禁教令以後）の4期に分け、変遷をまとめている（田中 2012：402～404頁）。

また、今野春樹は、キリシタン墓碑を含む考古学または考古学に関連があると考えられる遺物や遺跡に関する研究に限定して、西日本地域・九州地域・東日本地域の地域別にキリシタン文化研究の展開をまとめている。キリシタン文化のさらなる理解のためには、キリシタンに関連する遺跡や遺物だけでなく、キリスト教の典礼・宣教師達の動向・当時の世相と布教などの歴史的背景、その他、周辺の様々な事象を知る必要があると述べ、その参考となる著作や論考について紹介している（今野 2003：24～32頁）。

その一方で、郷土史家や地元の研究会によっても、キリシタン墓の探索が行われた（吉田ほか編 1996）。しかし、それらの探索の中で「かくれキリシタン」墓とされた墓標などが、近世墓標として考古学的に検証された例は存在しない。

中・近世墓標の考古学的研究は、その嚆矢として坪井良平の「山城木津惣墓墓標の研究」が挙げられる。坪井は墓標を考古学の資料として捉え、考古学的観点からの近世墓標研究の可能性を説いた（坪井 1939）。坪井が近世墓標研究を考古学の研究対象として位置づけて以降、考古学的方法による墓標研究の必要性が説かれる。そして、実際に調査し報告される例がでてくる。こうした様々な観点からの報告・研究をまとめ、今後の研究の必要性・方向性・指針を示したのが坂詰秀一と谷川章雄である（三好 2021：19頁）。坂詰は1981年の調査研究で墓標を「塔形」と「非塔形」に分類した。「非塔形」には、銘文を刻んでいる面の数により「一観面」・「多観面」という分類を取り入れた（坂詰 1981：323～332頁）。谷川は江戸市中およびその周辺の墓標について、頭部と塔身の形態に着目し、A類：塔形のもの・B類：頭部が三角形のもの・C類：舟形光背に仏像を半肉彫りにしたもの・D類：頭部がかまぼこ状を呈するもの・E類：塔身が方柱形のもの・F類：笠付方柱形のもの・G類：その他の7種類に大別し、それをさらに細分している（谷川 1988：26～27頁）。

坂詰らが提示した研究の必要性・方向性を受けて以降、近世墓標の調査研究が本格的に行われるようになる。自治体が総合的な歴史調査の一環で墓標を

対象にする事例や、発掘調査に関連して墓標調査も行われる事例が顕著になる。こうした研究の多様化や拡がりを受けて、池上悟は全国各地で行われた既往の調査研究を概観し、提示されている形態分類を踏まえて、各地で汎用できる形態分類を提示した（三好 2021：21頁）。池上はまず墓塔・墓標・その他の3種類に大別し、さらに墓塔は5種類、墓標は14種類、その他は4種類に細分している（池上 2003：17～20頁）。白石太一郎・村木二郎は、国立歴史民俗博物館の共同研究として多くの研究者とともに、奈良県内で墓標の悉皆調査を行い、様々な観点から論考をまとめた（白石・村木 2004）。多様な観点からの取り組みを提起したことは、以降の近世墓標研究の在り方を大きく変容させた。さらに池上、白石らの研究により形態分類がある程度統一され、研究方法の入り口が整理された（三好 2021：23～24頁）。

長崎県島原半島でも近世墓の調査として、島原市教育委員会が実施した『島原藩主深溝松平家墓所調査報告』（宇土ほか編 2019）や、諫早市が実施したジブの墓・ビッチの墓・千々和ミゲル墓所推定地・山川内遺跡などの、キリシタン関連遺跡等の範囲確認調査及び関連調査の成果がまとめられた『諫早市キリシタン関連遺跡等調査報告書』（野澤ほか編 2024）などがある。しかし、江戸時代の庶民層の墓標調査事例は少ない。

以上の研究状況を踏まえて、本稿ではまず、調査対象墓地である南島原市深江町の妙行寺墓地・井出口（出口）墓地（図1）の全近世墓標の紀年銘と形態的特徴の調査を行った。その上で、「かくれキリシタン」墓とされた墓標について、近世墓標として考古学的に検討していきたい。本稿で検討対象とする墓標は、妙行寺墓地内にある例と、井出口（出口）墓地内にある例である。妙行寺の例は、吉田安弘らが、『島原半島の切支丹文化：かくれ切支丹の遺物と遺跡』で「T十字塚墓」と紹介している（吉田ほか編 1996：14頁）。井出口（出口）の例は、「十字は土中に隠して立っていた」と紹介している（吉田ほか編 1996：16頁）。「かくれキリシタン」墓とされるこれらの墓標が、近世墓標の中でどう位置づけられるのか、また、本当に「かくれキリシタン」墓と断定できるのか検討する¹。



図1 南島原市深江町の妙行寺・井出口（出口）墓地の位置
※国土地理院地図を一部改変して作成

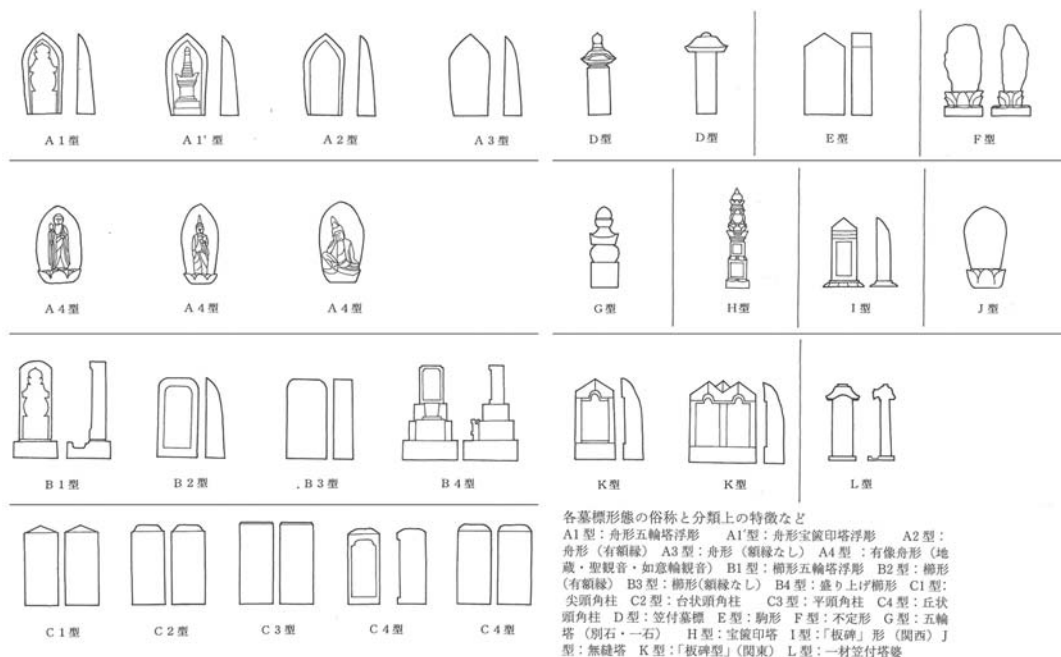


図2 朽木量による近世墓標型式分類 ※朽木 2004：図6を改変

2. 調査結果

調査の結果、妙行寺では84基、井出口（出口）では58基の近世墓標が確認できた。改葬によるものと思われるが、それらは4～10基ほどでまとめて建てられている場合が多かった。

なお、型式分類は朽木量（2004）（図2）にしたが

う。朽木は、坪井良平による「山城木津惣墓標の研究」（1939）を参考にA型：「舟形」・B型：「櫛形」・C型：「角柱形」・D型：笠付墓標・E型：「駒形」・F型：「不定形」・G型：五輪塔・H型：宝篋印塔・I型：「板碑」形（関西）・J型：無縫塔・K型：「板碑」形（関東）・L型：一材笠付塔婆・

M型：その他とする上記の13種類に大別し、それらをさらに細分している（朽木 2004：65～67頁）²。

1) 妙行寺墓地

妙行寺は、1658（万治元）年に創建された浄土真宗本願寺派の寺院である。1648（慶安元）年3月5日に僧開然が開基した。本尊は阿弥陀如来である。本堂の敷地は1785m²、墓地は1390m²である。もとは、東本願寺派であったが、1756（宝暦6）年7月23日、第5世住職正好の時に西本願寺派に転属した。昔は壮大雄麗な堂宇、堂塔、楼門などがあり、それらは島原・天草一揆時に焼失したと伝えられるが年代的に疑問がある。現在は「モダンな堂」が完成している（上田ほか編 1971：268～269頁）。島原・天草一揆のあと、乱後処理を任された高力忠房らが、民心の安定策として寺社仏閣の復興・創建を行っており（上田ほか編 1971：227～228頁）、妙行寺もこの政策の一環として建てられた可能性がある。

「かくれキリシタン」墓標（写真1）は「T字型塚墓」（吉田ほか編 1996：14頁）と紹介されている。本例は最大高43.0cm・最大幅44.0cm・奥行き43.0cmと、高さ・横幅・奥行きに差のない正方形に近い形状を呈している。また、正面には「明和七寅天 釋□仙位 八月十六日」と刻まれている。墓標頭部が屋根状の形態になっており、大棟に相当する部分から垂直に分岐して、前方に向かってのびる棟状の表現がある。そのため上面観が「T字」状になる（写真2）。吉田安弘らは、これを十字架の一種としてみなしたと考えられる。妙行寺の一般的な近世墓標の中ではやや異なる形態であるが、法名や銘文配列、全体としての彫り窪みは一般的な近世墓標と変わらない。



写真1 「T十字塚墓」（筆者撮影）



写真2 上面観に「T字」（筆者撮影）

2) 井出口（出口）墓地

井出口（出口）墓地は、共同墓地であり、宣教時代から禁教時代前期（五野井 2021：22～56頁）頃のキリシタン墓碑があることでも知られる（大石編 2012：153～163頁）。

「かくれキリシタン」墓標は「十字は土中に隠して立っていた」（吉田ほか編 1996：16頁）と紹介されている。たしかに、墓標下部（基礎部）に縦8.5cm、横9.5cmの十字状の記号が陰刻されている（写真3）。本例は最大高77.0cm・最大幅27.3cm・奥行き23.5cmである。宝暦3（1753）年銘で、正面に「宝暦三巳天 □□釈□順位 四月十四日」と刻まれている。型式は、朽木分類のE型：駒型（形）に該当する。十字状の記号以外は一般的な近世墓標の外観である。



写真3 「かくれキリシタン」墓とされた墓標（左）と十字状の記号拡大（右）（筆者撮影）

3. 両墓地における近世墓標の型式

1) 妙行寺

妙行寺でみられた主な近世墓標の形態は、朽木分類におけるB型：楕型（形）・C型：角柱型（形）・E型：駒型（形）である。その他に、墓標頭部が、花燈窓の頭部に類似した墓標を識別した（以下、花燈型と呼ぶ）。これらの型式については、第4項「両墓地における近世墓標の変遷」で詳しく述べる。

本墓地の角柱型は延享4（1747）年に初出するが、その最古例の大きさは、最大高61.0cm・最大幅19.5cm・奥行き17.5cmであり、妙行寺の他の角柱型（背高平均65.9cm・幅平均30.5cm・奥行き平均28.7cm）に比べ、幅と奥行きが11.0cm程短い。

また、妙行寺では朽木分類のD型：笠付墓標を13基確認変遷をみることができた（図3）。年代順に並べ形態的特徴をみていくと、時代が下るにつれて笠の反り方が大きくなる。最終的には笠の先端が丸まり蕨手のようになる例がでてくる。明和8（1771）年銘の墓標以降、笠に唐破風のような装飾を施す例が優勢になる。紀年銘や法名などの銘文については、正面だけでなく、右側面か左側面またはその両方に刻む「多観面」で、1基につき2人以上の法名を刻む例がほとんどであった。

妙行寺では、楕型・角柱型・駒型・花燈型・笠付以外の型式が6つ確認できた（図4-1～8・写真4）。1つ目は正面観が長方形の墓標である。7基確認できた。ただ、そのうち3基はほとんどが土に埋まっており、紀年銘や法名などは確認できなかった。それら以外の4基（図4-1～4）は、延享4（1747）年銘（図4-1）、寛延2（1749）年銘（図4-2）、明和6（1769）年銘（図4-3）、安永3（1774）年銘（図4-4）である。4基の大きさは、図4-1は最大高40.0cm・最大幅23.0cm・奥行き17.8cm、図4-2は最大高50.5cm・最大幅



図3 妙行寺墓地の笠付墓標の型式組成変遷



図4 妙行寺墓地の櫛型・角柱型・駒型・花燈型・笠付以外の墓標型式例

27.0cm・奥行き18.3cm、図4-3は最大高46.8cm・最大幅23.5cm・奥行き18.0cm、図4-4は最大高36.7cm・最大幅27.0cm・奥行き23.5cmであり、現代の一般的な直方体の竿石に比べると背が低い。寛延2（1749）年銘の例（図4-2）のみ、墓標頭部の角が削られている。2つ目は舟型墓標である（図4-5）。墓標頭部については、朽木分類のA3型：舟型（形）（額縁なし）に相当する。2基確認できたが、そのうちの1基は、風化より全体的に状態が悪く、紀年銘や法名などは確認できなかった。図4-5は、文化5（1808）年銘で、「早世」と刻まれていることから、子供の墓標だと考えられる。3つ目は墓標頭部が山状の墓標である（図4-6）。明和5（1768）年銘で、「溪道童子」と刻まれていることから、子供の墓標と考えられる。墓標頭部は駒型や花燈型ほど三角形状ではなく、櫛型ほど緩やかな弧を描いていない。紀年銘からも、この墓標は、櫛型への移行期にあたる例だと考えられる。4つ目は円柱形状の墓標である（図4-7）。宝暦3（1753）年銘で、直径9.0cm・高さ35.8cmと背が低い。5つ目は自然石である（図4-8）。宝

永8（1711）年銘で、最大高約90.0cm・最大幅約120.0cm・奥行き約85.0cmであり、幅と奥行きは、本墓地の近世墓標の中で最も大きい。正面に「宝永八〇稔 濃（法の異体字）名釋法圓阿惟 三月朔日」と刻まれている。銘文が刻まれている正面のみ整形され、それ以外は特に加工されていない。6つ目は、長屋のような形をした墓標である（写真4）。大棟に相当する部分に対して、平行な位置関係にあたる片側壁面に「南無阿弥陀仏」と刻まれている。この例については第5項「「かくれキリシタン」墓標の検討」で詳しく述べる。

2）井出口（出口）

井出口（出口）でみられた主な近世墓標の形態は、妙行寺と同様、櫛型・角柱型・駒型・花燈型であった。こちらも第4項「両墓地における近世墓標の変遷」で詳しく述べる。

笠付墓標については、嘉永7（1854）年銘、安政2（1855）年銘の2基しか確認できず、年代も近かったため、型式組成変遷を確認することはできなかった。法名は、1基につき2人以上刻む。2基と



1. 寛延2 (1749) 年銘



2. 安政3 (1856) 年銘



3. 明和8 (1771) 年銘



4. 宝暦5 (1755) 年銘



5. 寛保3 (1743) 年銘

図5 井出口（出口）墓地の櫛型・角柱型・駒型・花燈型・笠付以外の墓標型式例

も「多観面」であった。

井出口（出口）でも、櫛型・角柱型・駒型・花燈型・笠付以外の型式が6つ確認できた（図5-1～5・写真5）。1つ目は正面観が長方形形状の墓標である（図5-1）。1基確認した。寛延2（1749）年銘で、最大高35.5cm・最大幅23.5cm・奥行き15.8cmであり、妙行寺の例（図4-1～4）と類似する。2つ目は舟型墓標である（図5-2）。1基確認した。安政3（1856）年銘であり、妙行寺の例（図4-5）と類似する。3つ目は墓標頭部が山状の墓標である（図5-3）。明和8（1771）年銘で、妙行寺の例（図4-6）と類似する。本例も、櫛型への移行期にあたる墓標だと考えられる。4つ目は円柱形状の墓標である（図5-4）。宝暦5（1755）年銘で、妙行寺の例（図4-7）と類似する。風化が激しく法名などは確認できなかった。5つ目は六角柱形状の墓標である（図5-5）。寛保3（1743）年銘であり、墓標頭部については、朽木分類のC1型：尖頭角柱に類似する。スペースの問題からか紀年銘の下に法名が刻まれており、銘文配列も、同墓地内の他の近世墓標と比べ特異である。6つ目は、長屋のような形をした墓標である（写真5）。「南无（無の異体字）阿弥陀仏」と刻まれており、妙行寺の例（写真4）と類似する。この例についても第5項「「かくれキリシタン」墓標の検討」で詳しく述べる。

4. 両墓地における近世墓標の変遷

まず、両墓地の墓標型式ごとの基数を年代順に示した（表1・2）。また、両墓地でみられた主な近世墓標の形態は、朽木分類におけるB型：櫛型（形）・C型：角柱型（形）・E型：駒型（形）、そして花燈型である。

妙行寺は元禄10（1697）年銘、井出口（出口）は元禄9（1696）年銘の駒型から始まる。その後、妙行寺では、櫛型が1730（享保15）年、花燈型が1740（元文5）年、角柱型が1747（延享4）年に初出する。井出口（出口）では、花燈型が1706（宝永3）年、櫛型が1736～1741（元文年間）、角柱型が1820（文政3）年に初出する。両墓地ともに1771～1790年頃から櫛型が卓越するようになる（図6）。それだけでなく、1770年以前は、墓標型式や大きさが不統一であったのに対し、1771年以降は、ほぼ同等の大きさの櫛型や角柱型に統一されていく（表1・2）。谷川章雄は、櫛型が発生する以前には、異なる特徴の墓標が盛行しており、一定の地域性があったとしている。しかし、櫛型発生以降は、全国的に墓標型式が斉一化してくることを指摘している（谷川1988：29頁）。櫛型は18世紀前半～中頃に出現し普遍化（三好 2021：220頁）、また、角柱型は18世紀前半頃に発生し19世紀以降に全国的に普及する（三好 2021：216頁）とあるが、両墓地ともに全国的な動向に共通することを明らかにできた。

紀年銘や法名などの銘文については、両墓地とも

表1 妙行寺・型式別変遷

	駒型	花燈型	櫛型	角柱型	笠付	その他	合計
1710以前	2				1		3
1711～1730	2		1		1	1（自然石）	5
1731～1750		2	1	1	1	2（正面観が長方形状）	7
1751～1770		1		1	1	1（写真1） 1（墓標頭部が山状） 1（正面観が長方形状） 1（円柱形状）	7
1771～1790		1	6	1	2	1（正面観が長方形状）	11
1791～1810			7	3	2	1（舟型）	13
1811～1830			4	4	1		9
1831～1850			2	4	2		8
1851～1870			1	2	1		4
合計	4	4	22	16	12	9	67

表2 井出口（出口）・型式別変遷

	駒型	花燈型	櫛型	角柱型	笠付	その他	合計
1710以前	1	1					2
1711～1730	2	1					3
1731～1750	3	1	1			1（正面観が長方形状） 1（六角柱形状）	7
1751～1770	6					1（円柱形状）	7
1771～1790	1		5			1（墓標頭部が山状）	7
1791～1810			6				6
1811～1830			3	2			5
1831～1850			2	1			3
1851～1870			2		2	1（舟型）	5
合計	13	3	19	3	2	5	45

に、駒型は全て、正面にのみ刻む「一観面」であった。櫛型は、妙行寺は寛政6（1794）年銘、井出口（出口）は寛政2（1790）年銘の墓標以降、「多観面」の例が複数確認できる。花燈型は、両墓地ともに、ほとんどが「一観面」であったが、妙行寺の安永5（1776）年銘の例のみ「多観面」であった。角柱型は両墓地ともに全て「多面観」であった。「一観面」から「多観面」への変遷時期は18世紀中頃（三好 2021：219頁）とあるが、こちらも全国的な動向に共通することを明らかにできた。

ちなみに、寛政4（1792）年銘の墓標が妙行寺で5基（櫛型4基・笠付1基）、井出口（出口）で2基（櫛型2基）の計7基確認できた。1792（寛政4）年は「島原大変肥後迷惑」が起きた年であり、それにより多くの死者が出た。「島原大変肥後迷惑」とは、

雲仙普賢岳の火山性地震と噴火活動、それによる眉山の大崩壊という日本の火山災害史上最大の犠牲者を出したといわれる大災害である。この大災害による島原城下と有明海に面した島原半島東岸域側の死者は約10000人、有明海を挟んだ対岸の肥後（熊本本土・天草諸島）側の死者は約5000人の、計15000人にのぼったと記録されている（山本 2013：187～188頁）。寛政4（1792）年銘の墓標が7基もあることは、この大災害により多数の犠牲者がでたことと関係している可能性がある。

5. 「かくれキリシタン」墓標の検討

1) 「T十字型塚墓」

写真1（妙行寺の例）は、一般的な近世墓標とや

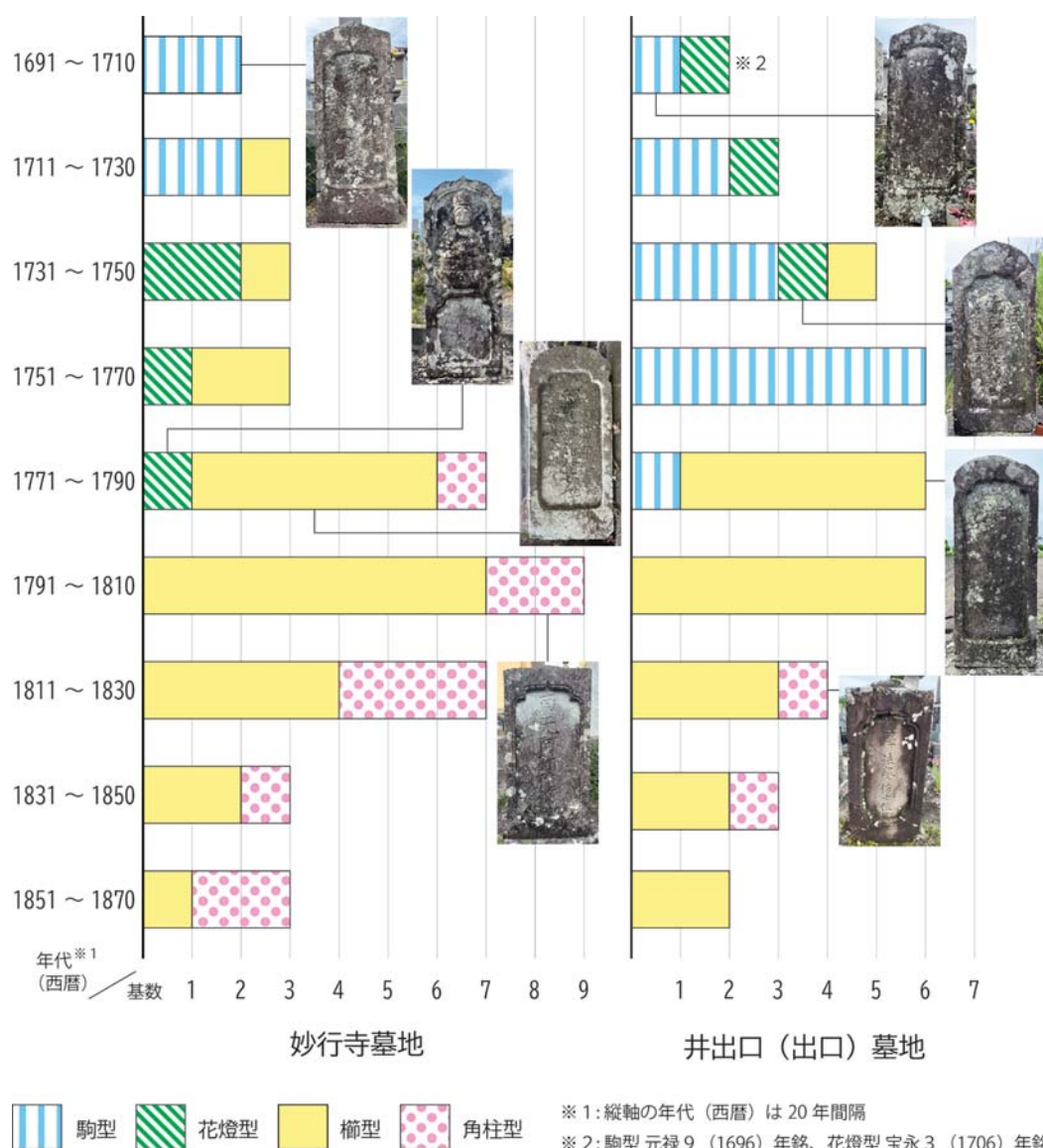


図 6 妙行寺・井出口（出口）墓地の駒型・花燈型・櫛型・角柱型の型式組成変遷

や異なる形態だが、一方でおおよそ類似する例が、妙行寺（写真 4）と井出口（出口）（写真 5）で 1 基ずつみられる。

写真 4 は最大高 38.0cm・最大幅 38.0cm・奥行き 46.0cm で、大棟に相当する部分に対して、平行な位置関係にあたる片側壁面に「南無阿弥陀仏」と刻まれている。写真 5 は最大高 39.0cm・最大幅 43.5cm・奥行き 47.0cm で、こちらも大棟に相当する部分に対して、平行な位置関係にあたる片側壁面に「南無阿弥陀仏」と刻まれている。3 基の大きさを比較すると、写真 1 と写真 4・5 は最大高（平均 40.0cm）・最大幅（平均 42.0cm）・奥行き（平均 45.0cm）ともに、それぞれ数 cm 程度の違いである

ことが判明した。さらに、大棟に相当する部分に対して、平行な位置関係にあたる片側壁面に銘文が刻まれるという点で、3 基は共通する。また、墓標頭部の屋根状の形態から、寺院建築を意識している可能性がある。写真 1 のみ、大棟に相当する部分から垂直に分岐して、前方に向かってのびる棟状の表現があるが、これは恐らく向拝^{こうはい}を現していると考えられる。

写真 1 は、一見すると、図 6 の変遷に位置づけられないようにみえる。しかし、正面観頭部は、駒型や花燈型と同様に、三角形状になる点で共通する。また、妙行寺の 1771 年以前の墓標は、不統一な型式や大きさである傾向だが（表 1・2）、その点でも共

通する。

ところで、写真1は、高さ・横幅・奥行きが同程度で、上面観が正形状であるが、その点に関しても九州や大阪府で、おおよそ類似する例がみられる。櫻井成昭によると、大分県豊後高田市^{かかち}香々地^{そうえい}の宗永墓地や、福岡県北九州市小倉北区の永照寺（写

真6）などでは、真宗門徒の墓標として、方柱状で頭部が四角錐または丸みを帯びた升のような低い形の墓標が存在する（櫻井 2004：40頁）という。宗永墓地は1650年代（櫻井 2004：40頁）、永照寺は17世紀末（柴尾編 1994：141頁）で、どちらも櫛型より先行する。



写真4 写真1に類似する墓標（妙行寺）
（筆者撮影）



写真5 写真1に類似する墓標
（井出口〔出口〕）（筆者撮影）



写真6 写真1に類似する墓標（永照寺）（筆者撮影）



写真7 写真1に類似する墓標（妙行寺）（筆者撮影）



写真8 写真1に類似する墓標（井出口〔出口〕）（筆者撮影）

また、大阪府泉佐野市野出町にある野出墓地には、北前船で財をなした豪商の食野家・唐金家の墓所がある。野出墓地は面積約7300m²、墓石が5000基以上ある大規模な墓地であり、その一角に食野家・唐金家の墓石約30基が、口の字に整然と並んでいる（泉佐野市役所 2022：26頁）。両家とも浄土真宗の信徒であり、その墓標は墓標頭部がドーム状や兜形で、高さ・横幅・奥行きに差のない正方形に近い形状を呈している（三好 2021：197頁）。

妙行寺（写真7）や井出口（出口）（写真8）にも高さ・横幅・奥行きにほとんど差のない宗永墓地や永照寺、食野家・唐金家の例とおおよそ類似する例がみられた。写真7は宝暦12年（1762）銘で、墓標頭部は朽木分類のC2型：台状頭角柱に類似する。写真8の墓標頭部は、朽木分類のC1型：尖頭角柱に類似する。紀年銘は風化が激しく確認できなかった。つまり、写真1でみられる高さ・横幅・奥行きが同程度の形態は、西日本における浄土真宗の一形態として捉えるのが妥当である。

2) 十字状の陰刻

「十字は土中に隠して立っていた」（吉田ほか編 1996：16頁）とある。ただ、十字状部分とその他の部分で、風化度合いなどに極端な違いはみられなかった。

また、銘文と十字状の記号の刻線幅を計測すると、銘文は0.3～0.5cm程度であるのに対し、十字状の記号は1.2～1.6cmと1.0cm程度太いことが判明した。同墓地内の他の近世墓標を調査しても、刻線幅が1.0cmを超える例はみられなかった。さらに、銘文は薬研彫りで断面が「V字」状であるのに対し、十字状の記号は断面が「U字」状であった。

本例の十字状の記号はギリシャ十字と類似する。島原半島には131基のキリシタン墓碑が存在し、その中にはギリシャ十字が刻まれている例もある。しかし、島原半島のギリシャ十字は、末端が3方向に分かれ花卉状になるいわゆる花十字紋（森脇 2012：481頁）や、末端が水平方向へ2方向に分かれるパテント・楯木型（^{しゅもく}松田 1975：103頁）に類似す

る例が一般的である。つまり、写真3は後世に刻まれた可能性が示唆される。

6. おわりに

今回の調査で、妙行寺墓地と井出口（出口）墓地の近世墓標の型式と変遷を確認した。その上で「かくれキリシタン」墓標を検討すると、妙行寺の例（写真1）は、西日本における浄土真宗系墓標の一形態の可能性が高い。井出口（出口）の例（写真3）は、刻線幅や断面形態、風化度合いなどから、十字状の記号は後世に刻まれた可能性が考えられる。

ところで、島原・天草一揆では、現在の南島原市深江町域を含む深江村から串山村まで（現在の南島原市全域と雲仙市の一部）の全村民が一揆側として参加した。一揆後、島原藩は住民の過半数を失っており、残った人々もみな困窮していた（南浦編 2018：39頁）。幕府は島原半島復興のために、九州の諸藩や幕領を中心とした西日本各藩³に対して移住令を出した（南浦編 2018：5頁）。こうした歴史的背景からも、南島原市深江町域に在来のキリシタンが残っていた可能性は考えにくい。

謝辞

本稿の執筆にあたり、多くの方にご協力いただきました。妙行寺・永照寺の近世墓標については、妙行寺三隅智城住職、永照寺村上慈顕住職に、資料調査のご協力とご教示を賜りました。執筆では、指導教員である西南学院大学大学院国際文化研究科教授・伊藤慎二先生、西南学院大学博物館学芸研究員・鬼東芽依氏に、懇切なご指導を賜りました。末筆ながら衷心より御礼申し上げます。

註

¹ 本稿は、鬼東芽依編『創られたキリシタン像：排耶書・実録・虚構系資料』に収録されている論考を基に、さらに詳細な調査分析結果全体を示したものである。

² 朽木は「形」を使用しているが、型式的特徴によって細分しており、本来は「型式」に相当するため、本稿では「型」を使用する。

³ 江戸幕府は、肥後熊本藩、讃岐国小豆島、豊後高松藩・臼

杵藩、肥前佐賀藩、薩摩藩、大隅国種子島、対馬府中藩などに対し、1642（寛永19）年に移住令を出している（南浦編 2018：41～43頁）。

引用・参考文献

池上 悟 2003「近世墓石の諸相」『立正大学人文科学研究 所年報40号』15～45頁、立正大学人文科学研究所
泉佐野市役所市民協働部自治振興課 2022「広報いずみさの 12月号 No.816」 泉佐野市役所市民協働部自治振興課
今野春樹 2003「キリシタン考古学研究の展開」『博望第4号』23～37頁、東北アジア古文化研究所
今野春樹 2013『キリシタン考古学：キリシタン遺跡を掘る』 ニューサイエンス社
上田俊之ほか編 1971『深江町郷土誌』 深江町
宇土靖之ほか編 2019『島原藩主深溝松平家墓所調査報告書』 島原市教育委員会
大石一久編 2012『日本キリシタン墓碑総覧』 南島原市教育委員会（世界遺産登録推進室）
鬼束芽依編 2024『創られたキリシタン像：排耶書・実録・虚構系資料』 西南学院大学博物館
片岡弥吉 1942「長崎県下キリシタン墓碑総覧」『キリシタン研究第一輯』109～246頁、東京堂
片岡弥吉 1976「キリシタン墓碑の源流と墓碑型式分類」『キリシタン研究第十六輯』115～140頁、吉川弘文館
北前船日本遺産推進協議会 2021「日本遺産 KITAMAE 荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間：北前船寄港地・船主集落 野出墓地」（北前船日本遺産推進協議会ホームページ：https://kitamae-bune-db.com/db/nodebochi/ 閲覧日：2024年11月20日）
朽木 量 2004『墓標の民族学・考古学』 慶應義塾大学出版会株式会社
五野井隆史 2021「潜伏キリシタン図譜・概説」『潜伏キリシタン図譜』20～63頁、潜伏キリシタン図譜プロジェクト実行委員会
坂詰秀一 1981「石造塔婆と墓標」『中山法華経寺誌』日蓮

宗大本山法華経寺
櫻井成昭 2004「真宗門徒の墓地と墓碑：西国東郡香々地町宗永墓地について」『大分県立歴史博物館研究紀要5』35～64頁、大分県立歴史博物館
柴尾俊介ほか編 1994『京町遺跡5（Ⅱ－4区の調査）：小倉駅前東地区第一種市街地再開発事業関係』 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室
白石太一郎・村木二郎編 2004「大和における中・近世墓地の調査」『国立歴史民俗博物館研究報告第111集』 国立歴史民俗博物館
田中裕介 2012「日本における16・17世紀キリシタン墓碑の形式と分類」『日本キリシタン墓碑総覧』389～406頁、南島原市教育委員会（世界遺産登録推進室）
谷川章雄 1988「近世墓標の類型」『月刊考古学ジャーナル 3月号 No.288』26～30頁、ニュー・サイエンス社
坪井良平 1939「山城木津惣墓墓標の研究」『考古学第十卷上（1990 復刻版）』310～346頁、示人社
野澤哲朗ほか編 2024『諫早市キリシタン関連遺跡等調査報告書』 諫早市
馬場紀聡 2024「南島原市深江町のいわゆる「かくれキリシタン」墓標についての検討」『創られたキリシタン像：排耶書・実録・虚構系資料』56～59頁、西南学院大学博物館
松田毅一 1975『キリシタン研究第二部論考編』 風間書房
南浦利早編 2018『島原大移住：戦乱の終わりに復興へ』 南島原市教育委員会
三好義三 2021『近世墓標』 ニューサイエンス社
森脇あけみ 2012「石の十字架：石造十字架からみたキリスト教信仰の地域様相に関する一考察」『日本キリシタン墓碑総覧』447～490頁、南島原市教育委員会（世界遺産登録推進室）
山本主税 2013「『嶋原大變記』にみる島原藩士と救護活動」『長崎国際大学論叢 第13巻』185～197頁、長崎国際大学
吉田安弘ほか編 1996『島原半島の切支丹文化：かくれ切支丹の遺物と遺跡』 島原半島かくれ切支丹研究会

馬場 紀聡（ばば きさと） 西南学院大学博物館学芸調査員